『死に至る病』における信仰の定義についての考察

鈴木祐丞

序

キェルケゴールは、『死に至る病』のなかで、同一の信仰の定義を繰り返し記している（*SKS* 11, 130, 146, 164, 196, 242 参照：桝田訳 p. 30, 60, 94, 153, 243 参照）。それらのうちのひとつを引用すれば、信仰とは、「自己自身に関係し自己自身であろうと欲するに際して、自己が自己を措定した力のうちに透明に基礎を置く i at forholde sig til sig selv og i at ville være sig selv grunder Selvet gjennemsigtigt i den Magt, som satte det」（*SKS* 11, 242: 桝田訳 p. 243）ことである。絶望を主題とする『死に至る病』の全体がじつは信仰へと向けて「舵取り」（*SKS* 11, 196: 桝田訳 p. 153）されていることを考え合わせれば、[1] この信仰の定義が何を意味するかを理解することは『死に至る病』の全体像を捉えるために必須のことであると考えられる。しかし、先行研究のうちには、この定義についての部分的あるいは直感的な解釈は多く散見されるものの、それについて主題的に論じたものは見受けられない。そこで、本稿では、この信仰の定義が何を意味しているのかを解明することを試みる。

以下では、上述の信仰の定義を前半部分（「自己自身に関係し自己自身であろうと欲するに際して」）と後半部分（「自己が自己を措定した力のうちに透明に基礎を置く」）の二つに分けたうえで、まず、それぞれが何を意味しているのかを考えてゆくことにする。そして、最終的にそれらを総合することにより信仰の定義の全体が何を意味しているのかを考えてみたい。

一　「自己自身に関係し自己自身であろうと欲するに際して」

はじめに、『死に至る病』の信仰の定義のうち、「自己自身に関係し自己自身であろうと欲するに際して」とは何を意味

するかについて考えることにする。ところで、このことを理解するためには、『死に至る病』全体がそれにもとづいて構成されるキェルケゴールの自己論（*SKS* 11, 129-130: 桝田訳 pp. 27-28）についての理解が必要となる。さらに、その自己論は、『死に至る病』中には直接的に提示されてはいないがキェルケゴールの思想の前提となっているキリスト教的な世界観のうちで眺められるとき、はじめてその全体的な意味合いが理解されるものである。そこで、以下では、まずキェルケゴールのキリスト教的世界観について概観し、ついで『死に至る病』におけるキェルケゴールの自己論についての本稿の解釈を記すことにする。これらを踏まえて、「自己自身に関係し自己自身であろうと欲するに際して」が意味していることがらを導き出したい。

一・一　キェルケゴールのキリスト教的世界観

キェルケゴールは『哲学的断片』のなかで自身のキリスト教的世界観について詳述している。同書を手がかりにすれば、そのキェルケゴールの世界観はつぎのようにまとめることができる。まず、神が万物を無から創造し主宰している（こうした考えは、『哲学的断片』に直接的に述べられてはいないが、キリスト教の基本的神概念であり、キェルケゴールも是認する考えであると思われる）。そして、神により創造された人間（*SKS* 4, 223 参照：大谷訳 p. 23 参照）はもともと神とのただしい関係のうちにあり永遠の浄福（「永遠の真理」*SKS* 4, 264: 大谷訳 p. 83）を享受していた（*SKS* 4, 223-224 参照：大谷訳 pp. 23-24 参照）。しかし、人間は、自らの責めにより永遠の浄福から断絶され罪のうちにあり、そして自力では罪から逃れられずにいる（*SKS* 4, 223-224 参照：大谷訳 p. 23-25 参照）。そこで、神は愛ゆえにそうした人間を救うことを決意する（*SKS* 4, 231-232 参照：大谷訳 pp. 36-37 参照）。その際神は人となることを選び、ここに絶対的逆説たる神人キリストが出現することとなる（*SKS* 4, 238 参照：大谷訳 p. 45 参照）。そしてキリストは人間に永遠の浄福へと回帰する道を示す（*SKS* 4, 223 参照：大谷訳 pp. 23-24 参照）。換言すれば、人間とは、キリストにしたがって永遠の浄福へと回帰するように神により求められている、あるいはそうできるか否かを問われている、そのような存在なのである。

一・二　『死に至る病』におけるキェルケゴールの自己論

さて、キェルケゴールは、このようなキリスト教的世界観を背景としながら、人間それ自身はいかなるあり方をしているのかを、『死に至る病』第一編冒頭でつぎのような自己論として描き出している。

人間とは精神 Aand である。しかし精神とは何か？　精神とは自己 Selvet である。しかし自己とは何か？　自己とは関係自身に関係する関係 Forhold である、あるいは自己とは関係において関係が関係自身に関係することである。自己とは関係ではない、そうではなく、関係が関係自身に関係することである。人間は、有限性 Uendelighed と無限性 Endelighed の、時間的なもの det Timelige と永遠なもの det Evige の、自由 Frihed と必然 Nødvendighed の、総合 Synthese である、ようするに人間とは総合なのである。総合とは二つのもののあいだの関係である。このように見られても、人間はいまだ自己ではない。／二つのもののあいだの関係においては、関係は消極的な統一としての第三者である、それら二つのものが関係に関係するのであり、関係において関係に関係するのである。そこで、心の規定の下では、心と身体のあいだの関係はそうした関係である。これに対し、関係が関係自身に関係するならば、こうした関係は積極的な第三者であり、これこそが自己なのである。…／こうした派生され措定された関係が、人間の自己であり、関係自身に関係しそして関係自身に関係することにおいて他者へと関係する関係である。(*SKS* 11, 129-130; 桝田訳 pp. 27-28)

では、こうした『死に至る病』のキェルケゴールの自己論はいかに理解されるべきであろうか。以下に本稿におけるこの自己論の解釈を記す。[2]

まず、この自己論は、下記の三つの階層的な命題から構成されているものと考えることができる。

1「人間は、時間的なものと永遠なものという二つのもののあいだの関係（総合）である[3]」。

2「そうした二項のあいだの関係（総合）がそれ自身に関係（態度決定）することとしてあるときに、はじめて人間は自己と言いうる[4]」。

3「こうした関係（総合）にたいして関係（態度決定）することとしての自己は、ある他者により措定された[5]」。

そのうえで、これら三つの命題はそれぞれ以下のように解釈することができる。

1「人間は、時間的なものと永遠なものという二つのもののあいだの関係（総合）である」。

まず、人間は、「時間的なもの」と「永遠なもの」という二項により構成された存在として捉えることができる。これらのうち、まず、人間における「時間的なもの」（「人間的なもの det Menneskelige」（*Pap.* VIII^2 B 168$_8$）[6]、「地上的なもの det Jordiske」（*SKS* 11, 165: 桝田訳 p. 97）とも呼ばれる）とは、人間がこの世での生を終えるときに失われるもののことと考えればよいであろう。具体的には心と身体の双方が含まれるものと考えておくことにする。つぎに、人間における「永遠なもの」（「神的なもの det Guddommelige」（*Pap.* VIII^2 B 168$_8$）とも呼ばれる）とは、人間がこの世での生を終えるときにも存在し続ける何かのことと考えればよいであろう。それは、人間のうちなる、永遠の命に与る部分のことであろう[7]。人間とはこうした二項からなる関係（総合）としての存在なのである[8]。

2　「そうした二項のあいだの関係（総合）がそれ自身に関係（態度決定）することとしてあるときに、はじめて人間は自己と言いうる」。

つぎに、たしかに人間は上述のように永遠なものと時間的なものという二項から構成された関係（総合）として存在するのだが、それにとどまるものではない。すなわち、関係（総合）としての人間自身がその関係（総合）をいかにあらしめるか能動的に関係（態度決定）[9]せねばならず、そして人間はそのように自らにたいして関係（態度決定）することとしてあるときにはじめてその本来的なあり方としてすなわち「自己」として生きていると言いうるのである。具体的に考えてみたい。関係（総合）としての人間を構成する一方の項たる時間的なもの（心と身体）は、この世における人間の死によってすべてが終結する時間的な世界に属し、時間的なさまざまな事物（富・名誉・近しい人びとなど）に価値を置く。他方で、関係（総合）としての人間を構成するもう一方の項たる永遠なもの（永遠の命に与る部分）は、この世における人間の死によっては終結することのない永遠の生に属し、永遠の浄福への回帰に価値を置く。そして、「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」（「マタイによる福音書」6:24）。すなわち、時間的なさまざまな事物（富・名誉・近しい人びとなど）に重きを置こうとする時間的なもの（心と身体）のもつ価値観と、永遠の浄福への回帰に重きを置こうとする永遠なもの（永遠の生に与る部分）のもつ価値観は、両立し得えず矛盾しあうのである。そして、関係（総合）としての人間を構成する二項のもつこうした矛盾し

あう価値観をまえに、関係（総合）としての人間自身が、どちらの価値観に重きを置いて生きるのかをたえず態度決定して生きねばならないのである。そして、そこでどのような態度決定をじっさいにするにせよ、そのように意識的に態度決定して生きる人間こそがその本来的なあり方としてすなわち自己として生きていると言えるのである。[10]

3　「こうした関係（総合）にたいして関係（態度決定）することとしての自己は、ある他者により措定された」。

そして、人間は、ある他者によって、そのような関係（総合）自身に関係（態度決定）することすなわち自己として、措定されたのである。なお、左に引用する『死に至る病』の草稿から、自己を措定した「他者」とは神のことであることが明確に知られる。

これがすなわち絶望がまったく存さなくなった状態を表す公式である：自己が、自己自身に関係し自己自身であろうと欲するに際して、自己を措定した力のうちに（神のうちに）透明に基礎を置く。（*Pap.* VIII^2 B 170$_2$）

すなわち、人間は、神によって、関係（総合）自身に関係（態度決定）する自己として措定されたわけである。[11] このことは、換言すれば、人間は喪失した永遠の浄福へと回帰するか否かを神により問われている存在であり、さらには、時間的なものと永遠なものという二項の関係（総合）たる人間がその関係（総合）自身をいかにあらしめるべく関係（態度決定）するかのうちにそうした神による問いかけにたいする人間の回答が本来的に現れるということを、意味するものと考えられるのである。

以上が『死に至る病』のキェルケゴールの自己論についての本稿の解釈である。

一・三　「自己自身に関係し自己自身であろうと欲するに際して」とは何を意味するか

さて、上述のキェルケゴールのキリスト教的世界観と自己論についての解釈から、『死に至る病』の信仰の定義のうちの前半部分「自己自身に関係し自己自身であろうと欲するに際して」が意味することがらを導き出すことが可能であるものと思われる。すなわち、それは、永遠なものと時間的なものという二項からなる関係（総合）自身に関係（態度決定）することとして（すなわち自己として）神により措定された人間が、じっさいにその関係（総合）をいかにあらしめるか

能動的に関係（態度決定）しようと欲するに際して、ということを意味しているのである。先述の具体例にのっとって考えてみたい。人間は、時間的なもの（心と身体）と永遠なもの（永遠の生に与る部分）により構成され、そして、時間的なさまざまな事物（富・名誉・近しい人びとなど）に重きを置こうとする時間的なもの（心と身体）のもつ価値観と、永遠の浄福への回帰に重きを置こうとする永遠なもの（永遠の生に与る部分）のもつ価値観は、両立し得ず矛盾しあうのであった。そして、この矛盾を目の当たりにして、何らかの仕方で矛盾に対処して生きようと欲するにあたって、ということが、信仰の定義の前半部分で意味されていることなのである。

二　「自己が自己を措定した力のうちに透明に基礎を置く」

つぎに、信仰の定義の後半部分「自己が自己を措定した力のうちに透明に基礎を置く」が何を意味するか考えることにする。なお、この部分のうち、「自己」とはいかなるものかについて、また「自己を措定した力」が神であることについては、前章において明らかとなったので、本節では「透明に基礎を置く」（このうちとくに「透明に」）とは何を意味するかに焦点を合わせることにする。

それでは、永遠なものと時間的なものという二項の関係（総合）自身に関係（態度決定）することたる自己が、そのように自己を措定した神のうちに、「透明にgiennemsigtigt」基礎を置くとは、何を意味するのであろうか。

ここで、先行研究を見渡してみると、信仰の定義における「透明に」が何を意味するかにかんして、少なくとも二つの相違する見解が存していることに気づく。ひとつは、「透明に」によって「我意をなくして」というような意味が表されているとする見解である。たとえば、大谷愛人・泉治典は、「透明に」とは、「神みずからが人間のために置いた関係に人間が合わされること」「反抗を捨てて信仰の従順によって立つこと」（大谷愛人・泉治典 1980, p. 188）と解している。他方は、「透明に」によって「最高度の自己意識をもって」といった意味が表されているとする見解である。たとえば、山本忠義は、「自己意識が上昇すればするほど、その透明度（純度）も増していく」（山本忠義 1998, p. 178）と述べている。

『死に至る病』[12]におけるキェルケゴールの「透明」という語の用法を考え合わせると、信仰の定義における「透明に」は「絶対的な意識をもって」という意味であること、したがってそれは上述の二つの見解のうち「最高度の自己意識をもっ

て」という意味である（あるいはそれに近い）ことが、明らかとなる。このことは、まず、キェルケゴールが『死に至る病』第一編C, B「意識という規定のもとに見られた絶望」の冒頭でつぎのように述べていることから導出される。

悪魔の絶望は最強度の絶望である。というのは、悪魔は純粋な精神であり、そしてそのかぎり絶対的な意識absolut Bevidsthedであり透明性Gjennemsigtighedであるからだ。（*SKS* 11, 157: 桝田訳 p. 81）

すなわち、この箇所の叙述から、「透明性」とは「絶対的な意識」のことであることが確認されるのである。つぎに、この箇所において「透明性」すなわち「絶対的な意識」とは「純粋な精神」のことであることも確認されるが、キェルケゴールは『死に至る病』の第一編C, B, a「絶望であることについて知らない絶望、あるいは自己と永遠な自己を持っていることについての絶望的な無知」において、つぎのように叙述しているのである。

自らを神のまえで個人的に精神として意識していないあらゆる人間的実存は、それゆえ透明に神のうちに基礎を置かない…あらゆる人間的実存は…絶望しているのである。（*SKS* 11, 161: 桝田訳 p. 88）

すなわち、この箇所において、「透明に」が「絶対的な意識」と同義である「精神として」という意で用いられているものと察せられ、かつここでは「透明に」が信仰の定義においてとまったく同一の用法で用いられているのである。これら二つの箇所における叙述を論拠に、信仰の定義における「透明に」とは「絶対的な意識をもって」を意味すると結論付けることは、不合理なことではないであろう。

では、「絶対的な意識をもって」とは何を意味するのであろうか。『死に至る病』においては、意識の度が増してゆくこととは、「自己自身にかんする明瞭さ」（*SKS* 11, 162: 桝田訳 p. 91）が深まってゆくことを意味している。それゆえ、「絶対的な意識をもって」とは「自己自身についてまったく明瞭になって」という事態を意味するものと考えられる。ここで先述のキェルケゴールの自己論を考えいれるならば、「絶対的な意識をもって」とは、人間が永遠なものと時間的なものという二項からなる関係（総合）自身に関係（態度決定）することとして（すなわち自己として）神により措定されているということにまったく明瞭になって、という事態を意味するものと考えられよう。

ここで、『死に至る病』の信仰の定義における「透明

に」についてのこのような本稿の解釈を支持し、さらにその解釈を深めるものと思われる先行研究に触れておきたい。ワトキン（Watkin, J.）は、キェルケゴールの「透明性Gjennemsigtighed」という概念の用法について研究を行っている（Watkin, J 2001 およびワトキン・J 1998 参照）。ワトキンは、まず、キェルケゴールの同時代に流布していたデンマーク語辞典[13]に記された「透明性」の意味にもとづいて、キェルケゴールにおける「透明性」の基本的意味を「何かの内とさらにはその何かを越えて見ることの可能性を作り出す清澄さ」（Watkin, J. 2001, 258）と規定する。そのうえで、ワトキンは、キェルケゴールがじっさいにこの基本的意味を踏まえて「透明性」という概念をさまざまなコンテクストにおいて用いていることを実証する（ibid. 258-259 参照）。そして、ワトキンは、下に引用するように、『死に至る病』の信仰というコンテクストにおいては、「透明性」が、その基本的意味を踏まえて、自己の内と自己を越えて神を見ることの可能性を作り出す清澄さという意で用いられていると、解している。

> ひとが自己の内をより清澄に見れば見るほど、ひとは、彼の神との関係についての気づきという意味で、その向こうに神をより清澄に見ることができる。（ibid. 259）

このようなワトキンの見解は、まず、「透明に」についての上述の本稿の解釈（「絶対的な意識をもって」すなわち「自己自身についてまったく明瞭になって」）を支持するものであろう。また、このワトキンの見解は、このように解釈される「透明に」が、自己自身についての明瞭な意識をもつこととそうすることによりその自己を措定した神にまで意識が及ぶということの重層的な意味合いを有しているということを、教えるものである。

以上から、信仰の定義の後半部分「自己が自己を措定した力のうちに透明に基礎を置く」とは、つぎのような事態を意味するものと言えよう。すなわち、永遠なものと時間的なものという二項からなる関係（総合）自身に関係（態度決定）することとして措定されている自己が、そのように自己を措定した神のうちに、自己がそのようなものとして神により措定されているということについてまったく明瞭になって、基礎を置く、という事態である。

結び

以上の本稿の論述をまとめれば、『死に至る病』における

信仰の定義「自己自身に関係し自己自身であろうと欲するに際して、自己が自己を措定した力のうちに透明に基礎を置く」とは、つぎのような事態を意味することとなる。すなわち、永遠なものと時間的なものという二項からなる関係（総合）自身に関係（態度決定）することとして（すなわち自己として）神により措定された人間が、じっさいにその関係（総合）をいかにあらしめるか能動的に関係（態度決定）しようと欲するに際して、そのように自己を措定した神のうちに、自己がそのようなものとして神により措定されているということについてまったく明瞭になって、基礎を置く、ということである。このことをふたたび先述の具体例を用いて捉えなおしてみよう。人間は、時間的なもの（心と身体）と永遠なもの（永遠の生に与る部分）により構成され、そして、時間的なさまざまな事物（富・名誉・近しい人びとなど）に重きを置こうとする時間的なもの（心と身体）のもつ価値観と、永遠の浄福への回帰に重きを置こうとする永遠なもの（永遠の生に与る部分）のもつ価値観は、両立し得ず矛盾しあう。この矛盾を目の当たりにして、何らかの仕方で矛盾に対処して生きようと欲するときに、そのような矛盾を抱えたものとして措定された自己について明瞭な意識をたえずもちつつ、そしてそうすることによりけっきょくはそのように自己を措定した神にまでたえず意識を及ぼしつつ、我意にもとづいてではなく神意にもとづいてその矛盾に対処する。このような自己が信仰を体現しているのである。

さいごにひとつ付言しておきたい。本稿の解釈によれば、『死に至る病』の信仰の定義における「透明に」とは、「絶対的な意識をもって」「純粋な精神として」「自己自身についてまったく明瞭になって」ということを意味した。「透明に」をこのように解釈することは、つぎのような事態を含意することとなるのである。すなわち、絶対的な意識をもたずに（すなわち純粋な精神としてではなく、あるいは自己自身にかんぜんには明瞭になっていないながら）神に基礎を置くことは、信仰ではないのである。つまり、時間的なもの（心と身体）のもつ価値観と永遠なもの（永遠の生に与る部分）のもつ価値観が矛盾しあうことについて、そしてそのような矛盾をはらんだものとして人間は神により措定されていることについて、多少でも不明瞭であるばあいには、いくら神意にもとづいた生を送ろうとも、その生は信仰ではないのである。信仰とは、そのような自己についてまったく明瞭になったうえで神意にもとづいて生きることなのである。このような事態を言い換えれば、キェルケゴールにとっては、たとえば自己のもつ矛盾についてまったく意識をしたことがないながら神意にもとづいて生きること（大雑把に言えば、子どもの生）は信仰とは呼びえず、自己のもつ矛盾についてかんぜ

んに意識しその矛盾が生み出す苦悩に直面したうえで神意にもとづいて生きること（すなわち「反省のあとの直接性」[13]（*SKS* 20, 362, 364））こそが信仰なのである。

文献

キェルケゴールの著作および日誌からの引用は、『批評的新版全集』（*Søren Kierkegaards Skrifter*, bd. 1-55, København 1997-.）に拠り、略号（*SKS*）、巻数、頁数の順に記した。その際、可能な限り邦訳の頁数も併記した。なお、『英訳全集』（*Kierkegaard's Writings*, vol. 1-26, Princeton 1978-1998.）からの引用の場合は、略号（*KW*）、巻数、頁数の順に記した。キェルケゴールの著作の草稿からの引用は、『日誌・遺稿集』（第二版）（*Søren Kierkegaards Papirer*, bd. I-XVI, København 1968-1978.）に拠り、略号（*Pap.*）、巻数、内容分類記号、記述番号の順に記した。

大谷愛人・泉治典（一九八〇）『キルケゴール　死にいたる病』、有斐閣
大谷長訳（一九八九）『哲学的断片或いは一断片の哲学』、創言社
鈴木祐丞（二〇〇九）「キェルケゴールの信仰観についての一考察―「反省のあとの直接性」とは何か―」、『新キェルケゴール研究』、第7号、pp.20-36
鈴木祐丞（二〇一〇）「『死に至る病』における「絶望の弁証法」についての考察」、『新キェルケゴール研究』第9号、準備中
桝田啓三郎訳・注（一九九六）『死にいたる病』、ちくま文庫（初出は一九六二）
マランチュク・G（大谷長訳）（一九八四）『キェルケゴールの弁証法と実存』、東方出版
マランチュク・G（藤木正三訳）（一九七六）『キェルケゴール　その著作の構造』、ヨルダン社[15]
山本忠義（一九九八）「キェルケゴールの「罪」理解―『死に至る病』を手掛かりに―」、『基督教学研究』、第18号、pp. 175-192
ワトキン・J（中里巧訳）（一九九八）「キェルケゴールの著作活動における「透明性」概念」、『宗教と倫理―キェルケゴールにおける実存の言語性―』、pp. 146-158、ナカニシヤ出版
Roberts, R. C.(1987),"The Grammar of Sin and the Conceptual Unity of *The Sickness unto Death*", *International Kierkegaard Commentary: The Sickness unto Death*, Mercer University Press, pp. 135-160.
Watkin, J.(2001), *Historical Dictionary of Kierkegaard's Philosophy*, Scarecrow Press.

注

（1）絶望を全編の主題とする『死に至る病』が信仰へと「舵取り」されていると言われるのは、絶望のうちに弁証法的な性格が存するからである。『死に至る病』における絶望の弁証法的性格がいかなるものかについては、拙稿 2010 を参照されたい。

（2）以下本稿では、引用文中に現れている三組の自己を構成する矛盾的二項のうち、「時間的なもの」と「永遠なもの」の組にだけ焦点を合わせて論じる。これは、分量的・内容的に『死に至る病』の中心である第一編C、B以下の叙述（そのうちに本校の考察の対象である信仰の定義が現れる）において、自己を構成する三組の矛盾的二項のうち「時間的なもの」と「永遠なもの」の組だけが現れていることによる。

（3）この命題を構成する根拠となるのは上掲の『死に至る病』の自己論のうちつぎの部分である。「人間は、有限性と無限性の、時間的なものと永遠なものの、自由と必然の、総合である、ようするに人間とは総合なのである。総合とは二つのもののあいだの関係である」（*SKS* 11, 129）。

（4）この命題を構成する根拠となるのは上掲の『死に至る病』の自己

論のうちつぎの部分である。「人間とは精神である。しかし精神とは何か？　精神とは自己である。しかし自己とは何か？　自己とは関係自身に関係する関係である、あるいは自己とは関係において関係が関係自身に関係することである。自己とは関係ではない、そうではなく、関係が関係自身に関係することである」(*SKS* 11, 129)、「これに対し、関係が関係自身に関係するならば、こうした関係は積極的な第三者であり、これこそが自己なのである」(*SKS* 11, 129)。

(5) この命題を構成する根拠となるのは上掲の『死に至る病』の自己論のうちつぎの部分である。「こうした派生され措定された関係が、人間の自己であり、関係自身に関係しそして関係自身に関係することにおいて他者へと関係する関係である」(*SKS* 11, 130)。

(6) 本稿において引用される"*Pap.* VIII²"の記述はいずれも『死に至る病』の草稿に該当する。

(7) この解釈はマランチュクに拠る。すなわち、マランチュクは「永遠なもの」を「霊」と捉える(マランチュク 1976, pp. 22-23 参照)。

(8) 心と身体が『死に至る病』の自己論における人間を構成する二つの側面(すなわち、無限性・永遠なもの・自由と、有限性・時間的なもの・必然)とどのように対応するかについては、キェルケゴールは明確なことを述べていない。本稿では、マランチュクの考えに従い、「時間的なもの」に心と身体の双方を配した(マランチュク 1984 p. 368 参照)。

(9) 「関係」と訳されるデンマーク語"Forhold"は、「関係」(ドイツ語の"Verhältnis")という意とともに「態度」(ドイツ語の"Verhalten")という意も併せ持っている(桝田啓三郎訳・注 1996, pp. 266-67 参照)。

(10) キェルケゴールはこうした自己を「精神 Aand (英訳では spirit (*KW* 19, 13))」とも呼んでいることから、こうした自己こそが永遠の命を生きる主体であること、さらには人間を構成する二項のうち永遠なものがそうした自己の存在論的な基盤であることが、うかがい知られる。なお、精神・自己の基盤が人間を構成する二項のうち永遠なものであるという解釈はマランチュクに従う(マランチュク 1984, p. 369 参照)。

(11) ここで、なぜキェルケゴールは自己を措定した「他者」とは神のことであることを明記しないのであろうか、という疑念がわく。このことを考えるにあたっては、ロバーツの研究(Roberts, R. C. 1987)が示唆に富む。すなわち、ロバーツによれば、自己が神により措定されたことが明示されず「他者」により措定されたと記される『死に至る病』の第一編においては、キリストをつうじての啓示による神概念は現れておらず(それは第二編においてはじめて現れる)、ただ「自己知から生成される神概念」(ibid. 149)すなわち「自然神学的な神概念」(ibid. 149)だけが現れているのである。そして、自己が神により措定されているということは、キリストをつうじての啓示によってはじめて知られることであると考えられるのである。

(12) 『死に至る病』全体において「透明…」と和訳しうる可能性のある箇所(すなわち"gjennem…"という単語)は23個ある。それらのうち、信仰の定義における「透明に」の意味の解明に寄与しうる箇所は、本稿で取り扱う二箇所だけである。

(13) Molbech, C. ed. (1833, 1859), *Dansk Ordbog*, København.

(14) キェルケゴールは、『死に至る病』の執筆と同じ時期(一八四八年春)に記された日誌のなかで、自身が「反省のあとの直接性」という信仰に到達した旨を記している(*SKS* 20, 362, 364 参照)。その「反省のあとの直接性」という信仰の境地がいかなるものかについての詳細は、拙稿 2009 を参照されたい。

(15) 本稿では、Malantschuk, G の日本語音写を「マランチュク・G」に統一した。

(すずき・ゆうすけ　筑波大学大学院博士課程
人文社会科学研究科　哲学・思想専攻)